

【三】加賀屋善蔵による『日蓮大聖人御伝記』の改訂・出版概観】延宝九(一六八一)年刊行の『日蓮大聖人御伝記』は、四版の刊行が確認されているが(拙稿「延宝九年刊『日蓮大聖人御伝記』の成立をめぐる」参照)、そのうち三・四版は加賀屋善蔵によって刊行されている。『文化九壬申歳改正板木総目録株帳』(『大阪本屋仲間記録』十三巻所収)には、「日蓮御伝記十 加善」とあり、文化九(一八一二)年にはすでに加賀屋善蔵が版權を所持していた。文化十三年には前版に手を入れずに刊行しているが、天保十四(一八四三)年には改訂版を刊行した。詳細は既に報告済みだが、相当数の訂正と頭注からは、日蓮宗関係の寺院や人師との関わりが必須と考えられる。ここからも、相版の書肆・村上勘兵衛との密接な関係性が想像される。

【四】加賀屋善蔵によるその他の伝記書の刊行】加賀屋善蔵は、『日蓮大聖人御伝記』以外にも、『高祖累歳録』や『高祖大士真実録』、『日蓮聖人一代図会』などには相版の書肆として名を連ねている。積極的に日蓮聖人伝の刊行・販売に携わっていた事実が知られる。

【五】小結】本発表によって、まずは書肆・加賀屋善蔵による日蓮宗関係書、とりわけ日蓮聖人伝の刊行事情についての紹介ができたと思う。今後は、加賀屋善蔵の総体的な出版活動とその中での日蓮宗関係書のしめる位置づけ、またその他の日蓮宗関係書を手がけた書肆の動向などについても検討していきたい。

長松日扇における教化活動の一考察

——本尊授与者をめぐって——

武田 悟一

安政四年一月一二日、京都において「華洛本門佛立講」を開講している長松日扇(清風)へ(一八一七—九〇)は、本仏釈尊の悟りの世界である法華経、それを顕揚している日蓮の教えである本化別頭教学、さらには八品門流の祖慶林房日隆の教えである本門八品教学を継承している在家者として知られている。その教えに立脚している日扇は、いかなる教化活動をしているのであろうか。

ところで、日扇の安政四年の開講から明治二三年の日扇死去に至る三四年の教化活動に注目してみると、信徒が日常における信行の礼拝対象、信仰のあかしとしての曼荼羅本尊を、日扇みずから染筆し信徒へ授与している行為が見逃せない。そこで曼荼羅本尊の授与に視点をあててみると、日扇は本尊に佛立講の講中の名前、あるいは日扇の弟子の名前、あるいは信徒の名前を明記していることに注目できる。この授与者を分類し整理することによって、日扇が授与者に対する信仰的教導の一側面が明らかになると考える。以下、曼荼羅本尊に記されている授与者について分類整理し、少しく検討してみたい。

さて、日扇が授与している本尊は、御牧日勤監修『佛立開導日扇聖人御本尊集』(平成七年)によって知られ、八八一点を収録している。さらに筆者の調査によって確認できている一点を加えると計八九二点となる。試みに八九二点を調査の対象として、授与者について検証してみると授与者が確認できる本

尊は、七四五点である。これらの授与者のうち、一には、講中に対して授与したものは四五点。二には、日扇の門弟に授与したものは一四点。三には、信徒に授与したものは六八六点、と三種類に分類できる。さらに三の信徒については、細かく分類してみると、以下のAからEに示すことができる。

まずAは、男性の信徒に授与したもので五三三点確認できる。このうち信徒が所属している講中の名称も含めて記載されているものは二六八点である。また授与者の氏名のみは二六五点であり、講中名・氏名の記載と、氏名のみ記載の数はおよそ同じである。

ついでBは、女性の信徒に対して授与したものである。その数は九二点であって、男性信徒の授与数と比較するとその数が少ないことがわかる。この九二点のうち、所属する講中名と氏名の記載があるものは三五点、氏名のみは五七点確認できる。

つづいてCの分類は、一点の本尊に対して授与者の記載が二名あるものが六点みられる。この分類には、夫婦に対しての授与であったり、あるいは日扇が最初に授与した信徒の名前に、さらに他の信徒の名前を追記して授与しているもの、あるいは授与されたのが事情により、その信徒の名前を修正して再び授与しているもの等がある。

つぎにDの「不詳」は計一五一点が知られる。この分類には、授与者の記載が名字のみで性別の判断が出来ない本尊が一二点、あるいは『御本尊集』に写真の収録はなく記録のみで、授与者の存在は知られるものの名前が明らかにされていないものは二点、あるいは本尊が破損等して授与者の判読が困難な

ものは一点である。

さて、最後のEの分類は、授与者名が抹消されているもので計四〇点確認できる。すなわち、日扇によって記された授与者名が事情により墨などで塗りつぶされているもの、あるいは名前の記載部分が切り取られ、その箇所に別の紙を貼付して修復しているものが確認できる。しかも、その一部の本尊には修復した箇所に他筆で授与者名が明記されている。

このようにみえてくると、日扇の曼荼羅本尊にみる授与者は、大別三種類に分類でき、信徒の分類においては五種類、さらに小別五種類に分類されることが確認できるのである。

なお、日扇による授与者の教導については、今後の課題としたい。

藤井日達の仏教アジア主義と

マハトマ・ガンディーの近代文明批判

外川 昌彦

本報告では、戦前の日本山妙法寺のアジア布教の展開を、山主・藤井日達(一八八五—一九八五)のインド認識の形成を通して検証し、近代の日本仏教でもユニークなインド布教を実践した藤井のアジア認識を跡付けるものである。特に、透徹した近代文明批判で知られるガンディーの著作、『ヒンド・スワラージ』(インド独立)への藤井の思想的共鳴が、ガンディーとの出会いを導く契機を与え、それによって日本山の活動領域も、大陸布教の範囲を超えた英領インドへと展開してゆくものと考えられる。そのため、藤井のガンディー思想との出会いを、本